赤い糸が切れるとき

神狩夜アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸が切れるとき

【Nコード】

N4193J

【作者名】

神狩夜アイ

【あらすじ】

彼女がいる先輩を好きになった友達のサツキ。赤い糸って、運命って……思ってたよりも脆い。

「あたし、絶対あの先輩と付き合おうの！ これは恋に恋してるとか、恋愛ごっことかじゃなくて、真剣に純愛を追い求めてるんだから！」
さつきからサツキは絶え間なくピーチクパーチク、どこのおバカなケータイ小説からパクってきたんだと言わんばかりのセリフを繰り返して、連呼している。

どうやらサツキは部活の一つ上の先輩に一目惚れしてしまったらしいのだ。相手からはまだ後輩としか見られていないし、さほど話したこともないけれど、彼女いわく「運命の相手」だそう。しかし、その先輩には彼女がいる。中学の頃から付き合っている、校内公認の仲良しカップル。

そこに割りこもうと言うの？ あんたは。

「割り込むなんて人間の悪い。あたしは自分の力で先輩を振り向かせてみせるの。そしたら、先輩の判断であたしを好きになったってことになるから、浮気でも、ましてあたしが彼女から先輩を横取りしたってことにもならないし？」

「サツキがそう思っても、世間目は冷たいよ」私は机に肘をついて、夕暮れ迫る真っ赤な教室の空気を目いっぱい吸い込んだ。「無理だって」

「アピる前から無理とか言わないで！」

「だって彼女いるんでしょ？ もうその時点で本来余計な壁がずどんずどんって立ちふさがってるよ」

私も、その先輩カップルの中の良さは熟知していた。校内でイチヤつくなどといった節操のない、恥ずかしい真似はしないけれど、真剣に付き合っていていつかは結婚も視野に入れているらしい。まだ高校生なのに、思い切ったもんだ。

結婚したらきつとおしどり夫婦になる。そんな周囲の会話に耳をふさぎ、サツキは先輩への想いを断ち切れずにいた。

都合のいい話は無視。同い年なのに、子供じみて見える。

「もうやめときなつて。サツキにとって先輩は運命の相手でも、先輩にとっては今の彼女が運命の相手なんだよ」私はリプトンのパツクに直接指したストローから、甘ったるい紅茶をちゅごとつと吸い上げた。「運命で決められた仲は引き裂けないってね。世間では、友情は一生切れない縁だと綺麗事が飛びまわってるけど、恋愛は軽いものだと見られがち。でもそうでもない。先輩と彼女さんがこの先ずっと一緒にいることになれば、それは運命さまが決めたことなんだよ」

「そんなの」

サツキがばんっ、と机をたたいた。

「運命なんて、変えられる！ サラ・コナーも言ってるもん！」

数日後、サツキは雑誌に載っていた「憧れの人を振り向かせるモテ術」みたいな記事を鵜呑みにして、部活内で散々先輩に色目を使った拳句、告白した、らしい。

節操無しというか、諦めがつかないというか。

当然のごとく振られてしまって、サツキは私に泣きついてきた。ゆっこおー先輩にふられちゃったよーうえーんあたしと先輩は運命の赤い糸で結ばれてるんじゃない？ 私は朝も早い廊下につっ立っておいおいと泣くサツキの頭を、はいはい分かったから、とつめきながらぼんぼん叩いていた。

「運命の赤い糸ねえ……」

私は授業中もぼんやり考えていた。

赤い糸なんて、まやかした。そんなものは現実にはありえない。少女漫画ドリームや綺麗事に守られて生きてきた子供たちの幻想だ。空も飛べると信じている幼子と何も変わらない。

赤い糸という単語が平気で蔓延して、しかも信じている人間がいる限り、この国は破綻の一途をたどり続けるのかも知れない。少なくとも、まともな純愛らしい純愛なんてありはしないのだ。お話の

中で十分。

しかし、それでも。

運命や真実なんて何一つありはしない中で、信じられるのは己だけ。それを実感できるのなんてまだまだ先かも知れない。

先生が退屈な授業を延々と続ける中、うつらうつらしていた私の肩から、後ろの席の子が小さく折りたたまれた紙切れを手渡してくれた。

「サツキから、ゆっこに」

彼女はそう言って、すぐに授業に集中するフリに戻る。

紙はかわいらしいピンクのメモ帳で、イチゴの形に丁寧に折られている。私はそれを破らないように開き、これまたかわいらしい丸字で書かれた手紙を読んだ。

『ゆっこは、こないだあんなこと言ってたけど、好きな人とかいないの？この世界には絶対に運命の赤い糸で結ばれた相手がいるんだって、そんな綺麗なことは考えたりしないの？』

先生の目を盗んで、自分が持っているメモ帳を一枚はがして、ペンケースの中にある膨大なカラーペンの中からピンクのハイテックを取り出した。キャップをしゅこんと抜き、返事を書く。

そう、私だって、信じているのは自分だけなんだ。

簡単な基本折りで済ませ、振り向かずに後ろの子に手渡す。「サツキに渡して」と、ぼそつと呟きながら。

順調に手紙はルートを辿ってサツキに手渡され、彼女が手紙を忙しなく開く音が聞こえた。

『考えないよ。運命の赤い糸なんて、綺麗事なんだから。だって、サラ・コナー及び各地の偉人が言うには、運命なんて変えられるんでしょ？矛盾してるよ、おばかさん』

(後書き)

ちよつと前、なんかの短編賞みたいなものに出して読者投票でおっ
こちたものです。

ざつと書いたもので、でもわりと気に入ってるんですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4193j/>

赤い糸が切れるとき

2010年10月21日22時34分発行